

## 平成28年度学校総合評価

### 6 今年度の重点目標に対する総合評価

本校の生徒は礼儀正しく意欲を持って何事にも真面目に取り組む反面、自主性、主体性に乏しい傾向が見られる。したがって、生徒が自ら高い進路目標を掲げ、意欲的に学習活動や学校生活に取り組むことを促す取り組みを継続している。

これを受け、今年度の具体的重点目標として「家庭学習の充実と教師の授業力向上」、「基本的生活習慣の改善と生徒支援スキルの向上」、「一人ひとりの生徒に応じた適切な進路指導の実践」、「学校行事への意欲的な取り組み」、「科学的思考力の習得」を掲げた。

自己評価では、5分野10項目の目標について、Aが4項目、Bが3項目、Cが3項目であった。特に評価Cの「家庭学習の充実」と「スマートホンの利用の改善」においては、生徒自身が、自主的・計画的に学習に取り組むようさらなる働きかけが必要である。また、「スマートホン」については、保護者への働きかけも含め、啓発活動を工夫して改善を図っていく必要がある。探究科学科を中心とする「課題発見力・論理的思考力の育成」においては、これまでの取り組みを検証し、科学的思考力を育成するための方策に改善を加えるとともに、教師間の連携を図り、より組織的に実践する必要がある。

### 7 次年度へ向けての課題と方策

今年度の学校経営計画とその評価を踏まえ、次年度も「一人ひとりの生徒が自ら学び、考え、行動する力を培い、科学的思考力や探究力など、より確かな学力とより高い目標に向け、主体的に進路選択する能力や態度を身につける」ことができるように実践研究や授業改善等を図る必要がある。

「教師の授業力向上」については、創校130周年の事業で整備されたICT設備の活用2年目となって、より多くの教師が必要に応じて日常的に利用する形態になっている。アクティブラーニング型授業の研究とともに、新学習指導要領に即応した、生徒が能動的に「学ぶ」授業への転換をさらに進める必要がある。

5 今年度の重点課題（学校アクションプラン）

重点項目	学習活動																																																																			
重点課題	家庭学習の充実（生徒）と教師の授業力向上																																																																			
現 状	（1）本校では家庭学習時間を1日平均4時間以上確保するよう指導しているが、目標を達成している生徒がいる一方で、平均2時間を下回る生徒も見受けられる。また、目標時間を確保しながらも、なかなか成績の向上に結びつかない生徒も見受けられる。																																																																			
達成目標	<p>〔家庭学習の充実〕</p> <p>①1・2年生の学習時間について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1日平均2時間未満の生徒の割合が10%未満。</li> </ul> <p>②効率的な学習について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・計画的で効率的な学習ができるようになり、学習の総量が増える生徒の割合 60%以上。</li> </ul>	<p>〔授業力向上〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学び合い」又は「ICTの活用」を行った授業の割合 70%以上。</li> <li>・授業満足度（分かりやすい説明、板書等） 70%以上。</li> </ul>																																																																		
方 策	<p>1 全体指導の強化に加え、担任による面接等を通し学習時間の確保に問題をかかえる生徒を重点的に指導する。</p> <p>2 時間の使い方について日頃から指導し、学習効率の向上に取り組ませるなど、学習の質を上げようとする意識を持たせる。</p> <p>3 各教科・科目において「学び合い」・ICTを活用した授業等を計画的に設定し、生徒の主体性を引き出す。</p>																																																																			
達成度	<p>①家庭学習時間 2時間未満生徒の割合</p> <table border="1"> <tr> <td>1年</td> <td>[4月]</td> <td>11% (18%)</td> <td>※( )内は昨年</td> </tr> <tr> <td></td> <td>[9月]</td> <td>16% (17%)</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>[11月]</td> <td>17%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>[4月]</td> <td>19% (17%)</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>[9月]</td> <td>19% (22%)</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>[11月]</td> <td>12%</td> <td></td> </tr> </table> <p>②「1学期より計画的で効率的になった生徒」</p> <table border="1"> <tr> <td>1年 [9月]</td> <td>71%</td> <td>2年 [9月]</td> <td>73%</td> </tr> <tr> <td colspan="4">「1日あたりの学習総量が増えた生徒」</td> </tr> <tr> <td>1年 [9月]</td> <td>59%</td> <td>2年 [9月]</td> <td>58%</td> </tr> </table>	1年	[4月]	11% (18%)	※( )内は昨年		[9月]	16% (17%)			[11月]	17%		2年	[4月]	19% (17%)			[9月]	19% (22%)			[11月]	12%		1年 [9月]	71%	2年 [9月]	73%	「1日あたりの学習総量が増えた生徒」				1年 [9月]	59%	2年 [9月]	58%	<p>①「学び合い」「ICTの活用」</p> <table border="1"> <tr> <td>1年</td> <td>[12月]</td> <td>91% (92%)</td> <td>※( )内は昨年</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>[12月]</td> <td>92% (91%)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>[12月]</td> <td>92% (96%)</td> <td></td> </tr> </table> <p>②授業の満足度</p> <table border="1"> <tr> <td>1年</td> <td>[7月]</td> <td>94% (83%)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>[12月]</td> <td>95% (84%)</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>[7月]</td> <td>90% (84%)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>[12月]</td> <td>93% (84%)</td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>[7月]</td> <td>95% (86%)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>[12月]</td> <td>94% (91%)</td> </tr> </table>	1年	[12月]	91% (92%)	※( )内は昨年	2年	[12月]	92% (91%)		3年	[12月]	92% (96%)		1年	[7月]	94% (83%)		[12月]	95% (84%)	2年	[7月]	90% (84%)		[12月]	93% (84%)	3年	[7月]	95% (86%)		[12月]	94% (91%)
1年	[4月]	11% (18%)	※( )内は昨年																																																																	
	[9月]	16% (17%)																																																																		
	[11月]	17%																																																																		
2年	[4月]	19% (17%)																																																																		
	[9月]	19% (22%)																																																																		
	[11月]	12%																																																																		
1年 [9月]	71%	2年 [9月]	73%																																																																	
「1日あたりの学習総量が増えた生徒」																																																																				
1年 [9月]	59%	2年 [9月]	58%																																																																	
1年	[12月]	91% (92%)	※( )内は昨年																																																																	
2年	[12月]	92% (91%)																																																																		
3年	[12月]	92% (96%)																																																																		
1年	[7月]	94% (83%)																																																																		
	[12月]	95% (84%)																																																																		
2年	[7月]	90% (84%)																																																																		
	[12月]	93% (84%)																																																																		
3年	[7月]	95% (86%)																																																																		
	[12月]	94% (91%)																																																																		
具体的な取組状況	<p>1 担任による面接を各学期2回程度行い、学習状況の把握、学習習慣や生活習慣の見直し・改善に向けたアドバイス等を行っている。</p> <p>2 学年集会等で「学習パターン」を具体的に提示し、夏休み・冬休み・春休み直前にはしおりを通して指針を示すなど、時間の自己管理について指導している。</p> <p>3 9月の学習時間調査前に行事後の生活の見直しを指導したが、十分な効果が見られなかったため追加の指導を行い、11月に再度調査を行った。</p> <p>4 アクティブラーニングの活用を学校全体に促し、「学び合い」の導入やICT機器の活用を含め、授業改善に努めていただくよう呼びかけている。</p>																																																																			
評 価	<p style="text-align: center;"><b>C</b></p> <p>2時間未満生徒の割合は昨年平均18.5%から<b>15.7%</b>へと若干の改善は見られたが目標の達成には至らなかった。その中でも1年4月時の11%や2年11月時の12%という数値から、その時期における意識の持たせ方が重要であることが読み取れる。</p> <p>学習効率の向上については7割の生徒が向上したと答えたが、学習総量の増加については<b>6割</b>の生徒にとどまった。</p>	<p style="text-align: center;"><b>A</b></p> <p>授業満足度は、どの学年においても昨年以上に高い数値を示した。これは、「学び合い」の定着により、生徒自身が主体的に授業に参加する意識が向上してきたことや、ICT機器の活用により授業の効率化が図られ、それに伴って生じる時間を考える時間にあてたりする取り組み等が広まってきたためではないかと推測される。</p>																																																																		
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習時間も重要だが、集中して取り組むような指導も大切だ。</li> <li>・ICTの長所短所を把握し、さらに授業を充実させる取り組みに期待したい。</li> </ul>																																																																			
次年度へ向けての課題	<p>学習習慣が定着しない生徒に対する粘り強い指導が必要。学習総量を向上させることで学力を向上させ、更なる学習意欲の向上につながるよう指導したい。</p>	<p>生徒の主体的学習態度の向上に向けて、「学び合い」やICT機器の活用の仕方などについて、今後も検討を進めたい。</p>																																																																		

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）

重点項目	学校生活																									
重点課題	基本的な生活習慣の改善と生徒支援スキルの向上																									
現 状	<p>本校では『生活あつての学習』を掲げ、規則正しい生活習慣の確立をめざしている。しかし、スマートフォン等を長時間使用し、学習に支障をきたす生徒も見受けられる。</p> <p>素直で真面目であるが、現実柔軟に対応できず悩みを抱えてしまう生徒が多く、高校生活に適応しづらくなっている生徒が増えている。教員・保護者が連携して生徒の現状把握に努め、ストレスや悩みの解消に向けて援助する取り組みが必要である。</p>																									
達成目標	[スマートホンの利用時間短縮]	②[生徒・保護者向け研修会等の充実]																								
	・概ね年間を通して、夜11時から翌朝7時までスマートフォンを使用しない生徒の割合が70%以上。	・生徒、教員、保護者を対象とする講演会や研修会・ワークショップを年間5回以上実施する。																								
方 策	<p>1 生活習慣が乱れていると考えられる生徒には、担任や学年主任が面接等をするとともに、保護者と連携し改善を促す。</p> <p>2 生徒に対して適宜講演会を企画するほか、教員・保護者が連携して生徒の現状把握に努め、心身に問題を抱える生徒を早期に発見し援助する。</p> <p>3 教育支援部や保健厚生部などと連携し、悩みやストレスに対応するためのスキルを、教員や保護者が学ぶ機会を設ける。</p>																									
達成度	<p>・夜11時から翌朝7時までの利用頻度</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>1年</th> <th>2年</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ほぼ使用しなかった</td> <td>13.4%</td> <td>10.6%</td> <td>12.1%</td> </tr> <tr> <td>10～30%使用</td> <td>16.9%</td> <td>13.2%</td> <td>15.2%</td> </tr> <tr> <td>30～50%使用</td> <td>14.7%</td> <td>18.0%</td> <td>16.2%</td> </tr> <tr> <td>50～80%使用</td> <td>17.7%</td> <td>18.0%</td> <td>17.9%</td> </tr> <tr> <td>ほぼ毎日使用</td> <td>37.2%</td> <td>40.2%</td> <td>38.6%</td> </tr> </tbody> </table> <p>概ね使用しなかった生徒の割合 <b>27.3%</b></p>		1年	2年	計	ほぼ使用しなかった	13.4%	10.6%	12.1%	10～30%使用	16.9%	13.2%	15.2%	30～50%使用	14.7%	18.0%	16.2%	50～80%使用	17.7%	18.0%	17.9%	ほぼ毎日使用	37.2%	40.2%	38.6%	<p>・1年生を対象とした研修会4回 (生徒支援プログラム、SNS安全教室、エイズ・性感染症予防健康教育講話、薬物乱用防止教室)</p> <p>・保護者対象の講演会2回 (受験生の保護者心構え、親の学び講座)</p> <p>・教員対象研修会1回 (QU)</p> <p style="text-align: right;">計7回実施</p>
	1年	2年	計																							
ほぼ使用しなかった	13.4%	10.6%	12.1%																							
10～30%使用	16.9%	13.2%	15.2%																							
30～50%使用	14.7%	18.0%	16.2%																							
50～80%使用	17.7%	18.0%	17.9%																							
ほぼ毎日使用	37.2%	40.2%	38.6%																							
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>各学年では担任だけでなく、生徒指導部員が基本的な生活習慣の大切さを促すとともに、事由によっては個人指導を行っている。</li> <li>各学級では、スマートフォン使用についての話し合いを持つなど、過度な使用を控える取り組みを行った。</li> <li>生徒支援部・保健厚生部・総務部などと連携を図りながら、研修会等を企画した。</li> <li>全校集会や学年集会で、基本的な生活習慣の大切さについて指導した。</li> </ul>																									
評 価	<b>C</b>	<b>A</b>																								
	・学習目的以外で、夜遅くまでスマートフォンを使用している生徒が多く、残念な結果であった。少なからず、学習や睡眠時間への影響が考えられる。	・学校生活の質を高めるため、生徒・保護者・教員それぞれに応じた講演会や研修会を、他の分掌と協力して開催した。それぞれの出席者はとても意欲的に参加し、問題点等を前向きに解決しようとする姿勢がみられた。																								
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>友人同士で決めたことを守る工夫は良い。部活動などの連絡についても基準を示してもらいたい。スマホなどの功罪について、家庭での指導・協力も得られるよう、啓発を続ける必要がある。</li> <li>生徒にも興味深い講演・研修が行われている様子が窺える。親向けの研修も充実していた。</li> </ul>																									
次年度へ向けての課題	<p>・スマートホンの使用については、生徒同士のルールづくりが効果的であると思われる。ネット社会の便利さと落とし穴を検証し、自らが望ましい使い方に気づくよう支援する必要がある。</p>																									

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	進路支援	
重点課題	一人ひとりの生徒に応じた適切な進路指導の実践	
現 状	<p>1 具体的な進路目標の決定が遅く、目標に向けた自主的・意欲的な学習に結びついていない生徒が少なくない。</p> <p>2 個々の生徒に応じた進路支援を行うよう努めているが、必ずしも生徒自らが自己の適性や能力を真剣に考えて進路目標を定めているとは言えず、自己を過大あるいは過小に評価したまま漠然とした進路目標の設定に終始してしまう生徒も見受けられる。</p>	
達成目標	①[進路意識の向上] 進路講演会、面談やオープンキャンパスへの参加を通して進路について考える意識が高まり、その目標がより明確化した生徒の割合が80%以上	②[高い進路目標の設定] 2年2月時点での難関10大学と医学部医学科を志望者している生徒の割合が60%以上
方 策	<p>1 各学年の進路指導の方針を明確にし、早期の進路目標決定の必要性について周知徹底を図るとともに、担任等による面接指導を徹底し、高い進路目標の設定やその実現に向けた助言などに努める。</p> <p>2 適切な進路指導を行うため、生徒にとって必要かつ有意義な情報の提供ができるように努める。</p> <p>3 社会人や大学生を招いてのキャリア講座・進路講演等を実施し、目標に向けた自主的・意欲的な学習に結びつくよう指導する。</p> <p>4 スケジュール帳を積極的に活用させ、進路目標の設定や学習習慣の向上に役立てさせる。</p>	
達成度	<ul style="list-style-type: none"> <li>進路講演会後のアンケート調査 「進路意識が高まった」と答えた生徒の割合 ①1学年進路講演会(7月) <b>94.4%</b> (240/255名) ②2学年進路講演会(8月) <b>89.2%</b> (239/268名) ③2学年進路講演会(12月) <b>97.4%</b> (266/273名)</li> <li>オープンキャンパス参加や大学訪問に関するアンケート調査(8月) 「この夏オープンキャンパスまたは大学訪問に参加した」2学年生徒 <b>84.3%</b> (226/268名) そのうち「意識が高まった」生徒 <b>96.9%</b> (219/226名)</li> <li>進路面談に関するアンケート調査(1月) 「面談をきっかけに進路についてより真剣に考えようとした」 <b>95.8%</b> (1年95.3%、2年96.3%) 「面談を通して進路目標が以前よりはっきりした」 <b>76.2%</b> (1年73.7%、2年78.7%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>進路希望調査 難関10大学と医学部医学科を志望者している生徒の割合 ①1学年 <b>64.6%</b> (181/280名) (12月進路希望調査) ②2学年 <b>51.3%</b> (142/277名) (1月進路希望調査)</li> </ul>
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>1、2年生を対象にして、以下の講演会を実施 ①1学年進路講演会(7月) 講師：野尻秀昭氏 (東京大学 生物生産工学研究センター 教授) ②2学年進路講演会(8月) 講師：宝島 格氏 (名古屋学院大学 商学部 教授) ③2学年進路講演会(12月) 講師：吉井健二氏 (駿台予備学校 お茶の水1号館 校長)</li> <li>2学年大学研究・オープンキャンパス参加</li> <li>1学年キャリアガイダンス(職業人との懇談会 8月)</li> <li>HRや学年集会・面接等による進路指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年集会や面接などで東京大学をはじめとした難関大で学ぶことの意義や魅力を紹介。(年間を通して)</li> <li>OB大学生講演会(2年5月)</li> <li>OB大学生との座談会(8月)</li> <li>東京大学訪問(2年8月)</li> <li>進路講演会の実施</li> <li>大学研究・難関大オープンキャンパス参加への取り組み(7月・8月)</li> <li>創校記念講演を利用したOBの講演 講師：NHK富山放送局長 松井治伸氏</li> </ul>
評 価	<b>B</b>	<b>B</b>
	<p>事後アンケートの結果より、いずれの進路講演会においても<b>約9割の生徒に進路意識の向上</b>が見られた。またオープンキャンパスや大学訪問をきっかけに進路目標が「明確化した」と答えた生徒は参加生徒の<b>9割以上</b>であったが、日程の都合などでそれらに参加できなかった生徒が全体の約2割弱いた。進路目標の明確化については<b>7割5分</b>の生徒が「明確になった」と答えたが、明確化できなかった生徒も<b>2割5分程度</b>いた。</p>	<p>各学年とも学年集会や面接指導などを通して高い志望を持つように働きかけてきた。結果として、<b>1学年</b>の進路希望調査では、難関10大学を志望しているものの割合が、7月147名から<b>12月時点で181名</b>に増加した。これに対し、<b>2学年</b>の進路希望調査では、難関10大学と医学部医学科を志望しているものの割合が、7月140名から<b>1月時点で142名</b>へとほぼ横ばいの結果であった。</p>
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>オープンキャンパスへの参加率が高いことに驚いた。目標を持っていない生徒に対し、行動を起こすことを強く勧めてほしい。</li> <li>難関大を目指すチャンスがある生徒たちであるはずなので、そのチャンスを十分活かさせてほしい。本人にとって本当にやりたいことを見つけさせていく指導もお願いしたい。</li> </ul>	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>進路講演会は生徒の進路意識向上に効果があり、今後も人選を慎重に行いながら継続したい。</li> <li>進路に関する面談については担任の先生だけでなく、生徒の相談内容に応じて、学年の先生、教科担当の先生や部活動の顧問の先生と連携し複数で指導にあたるよう工夫する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学研究・比較をさらに深化させ、難関大の魅力を確認させるることにより、高い目標に向け主体的に進路選択する能力や態度を身につけさせる。</li> <li>難関大に進学したOBとの懇談会の機会を増やし、その魅力を伝える機会を増やす。</li> </ul>

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	特別活動の充実	
重点課題	学校行事への意欲的な取り組み	
現 状	<p>学校行事は生徒の主体的活動を促し、心身の調和のとれた発達を図り学校の活力醸成の重要なものである。よって内容が豊かで充実していることが大切である。本校では生徒と教職員が協力して運営しているが、積極的に参加している生徒がいる反面、やや消極的で自主性・創造性に欠けた面も見うけられる。年間の行事の意義や各行事の目的・方法を検討するとともに、生徒の意識調査を通じて今後の学校行事への意欲的な取り組みにつなげていきたい。</p> <p>また、97%の生徒が部活動に参加している。より良い学校生活づくりに参画し、主体的な進路の選択に意欲的に取り組めるようにつなげたい。</p>	
達成目標	<p>本校二大行事（体育大会・文化活動発表会）に対して充実していると感じた生徒の割合80%以上。 特に意欲度・満足度では、80%以上になるようにする。 部活動に主体的に取組み、充実感を感じた生徒の割合 80%以上。</p>	
方 策	<p>1. 主な学校行事（体育大会、文化活動発表会）に対してアンケートを実施する。 ①計画・運営に協力できたか。②意欲的に参加できたか。③満足度 ④その他 等 2. 行事検討委員会において年間における特活行事の時期、目的、内容等の検討を行う。 3. 部活動の引退後、早期に進路の決定に向けて意欲的に取り組むことができたか、アンケート調査を行う。 ①部活動に所属していたか。②意欲的に参加できたか。③引退後、早期に切り替えができたか。</p>	
達成度	<p>&lt;3年生の体育大会アンケート結果&gt; ①協力度 ②意欲度 ③満足度 95.7% 86.5% 92.2%</p> <p>&lt;1・2年生の文化活動発表会アンケート&gt; ①協力度 ②意欲度 ③満足度 1年生 95.8% 86.5% 92.5% 2年生 88.3% 83.5% 85.1% 全 体 92.0% 85.0% 88.8%</p>	<p>&lt;3年生の部活動アンケート&gt; ①所属率 91.3% ②意欲度 97.8% ③一ヶ月以内の切替ができた 74.3%</p>
具体的な取組状況	<p>1. 体育大会については、昨年同様3年生から実行委員を選んで企画・運営を行った。実行委員が考え行動することで、生徒が主体的に行事に取り組むことができた。 2. 文化活動発表会については、1・2年生の生徒会が中心となって早くから企画・運営を行った。こちらも生徒自身が主体的に関わることで研究発表の内容が深いものとなった。 3. 多くの生徒が、3年次まで部活動に所属している。学級、学年以外に、部活動の場面でも顧問が生徒に積極的に声かけを行うなど、生徒の学習面でのフォローも行っている。</p>	
評 価	<p style="text-align: center;"><b>A</b></p> <p>・体育大会のアンケート結果では、どの項目も高い数値が得られた。生徒自身が体育大会を支えているという意識が数値からうかがえる。ただし、係役員などの負担が大きいという意見もあった。 ・文化活動発表会においても、すべての項目で高い数値が得られた。充実した活動だったと推察される。しかし、計画性の不足や友人との連携の難しさを訴える意見も散見された。</p>	<p style="text-align: center;"><b>B</b></p> <p>・部活動では、9割以上の生徒が3年次まで部活動を継続し、それらのほぼ全員が引退まで意欲的に参加できたと回答した。また、引退後の受験への切替も1月以内の生徒が7割以上を占め、夏休みには受験に向けて取り組めたとと思われる。</p>
学校関係者の意見	<p>・多くの生徒が充実感・達成感を感じる指導を今後も期待する。 ・学習室の土日開放など、学業と部活動の両立が保証されている点が良い。 ・部活動の計画を早めに示すなど、改善の余地がまだあると考える。部活引退から学習への切り替えがうまくいかなかったという生徒の理由を掘り下げてみる必要を感じる。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>・体育大会では、けがの防止を踏まえて、内容の検討と事前指導が必要である。 ・文化活動発表会では、準備期間の不足にならないよう、計画段階でさらに内容を具体化させて進めていくようにさせる。 ・部活動での意欲が、学習面での意欲につながるよう、今後とも指導していく。</p>	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった)

重点項目	科学教育の推進																
重点課題	科学的思考力の習得																
現 状	変化の激しいこれからの時代を生き抜くためには、「知識が豊富である」だけではなく、「自ら課題を設定し、論理的に思考し、科学的なスキルを活用し解決を図っていく力」が必要となる。それらを育む効果的な教育課程が求められている。																
達成目標	① [課題発見力・論理的思考力の育成] ※「論理的思考力評価」 学習確認テスト・自己評価アンケートにより「課題発見力」や「論理的思考力」が身についたと感じる探究科学科の生徒の割合 80%以上	② [意欲的学習態度の育成] ※「意識（興味・関心・意欲）調査」 「課題発見力」や「論理的思考力」を育成する学習に意欲的に取り組んだ探究科学科の生徒の割合 80%以上															
	1 「探究基礎Ⅰ」「探究基礎Ⅱ」の指導内容・指導方法を十分研究し、その教育課程について授業担当者の共通理解と密接な連携のもとに実施する。 2 単元ごとの自己評価に基づき、生徒自らより高い目標を設定し主体的に学習に取り組むことで、高い学力を形成できるよう指導する。また生徒の将来に必要な力を育むための教育課程であることを自覚させ、意欲的に取り組ませる。 3 巡検研修を「探究基礎Ⅰ」と、東京方面研修を「探究基礎Ⅱ」と効果的に連携させ、探究活動をより深められるよう実施する。 4 「課題発見力」や「論理的思考力」を育成する学習を、1・2年普通科「総合的学習の時間」の指導にも取り入れる。																
方 策																	
達成度	「論理的思考力」を図るテスト（2点×5問）の実施結果 <p style="text-align: center;">＜平均得点率＞（昨年）</p> <table border="0"> <tr> <td>①論理の前提と飛躍</td> <td>25.6%</td> <td>(29.2%)</td> </tr> <tr> <td>②推論の方法</td> <td>83.3%</td> <td>(87.0%)</td> </tr> <tr> <td>③原因と結果の関係</td> <td>87.2%</td> <td>(85.1%)</td> </tr> <tr> <td>④反論の方法と主張の補強</td> <td>74.4%</td> <td>(94.2%)</td> </tr> <tr> <td>⑤情報の整理</td> <td>29.5%</td> <td>(28.6%)</td> </tr> </table>	①論理の前提と飛躍	25.6%	(29.2%)	②推論の方法	83.3%	(87.0%)	③原因と結果の関係	87.2%	(85.1%)	④反論の方法と主張の補強	74.4%	(94.2%)	⑤情報の整理	29.5%	(28.6%)	「意識（興味・関心・意欲）調査」（3段階評価）の実施結果 <p style="text-align: center;">＜段階3：よくできるようになった、及び2：できるようになったの生徒の割合＞</p> 6月「論理的思考力を高める学習に興味を持って、自ら進んで取り組んだ。」 <p style="text-align: right;">・・・97.5% (97.3%)</p> 9月「仮説とその検証方法について意欲的に考えた」 <p style="text-align: right;">・・・100% (100%)</p>
①論理の前提と飛躍	25.6%	(29.2%)															
②推論の方法	83.3%	(87.0%)															
③原因と結果の関係	87.2%	(85.1%)															
④反論の方法と主張の補強	74.4%	(94.2%)															
⑤情報の整理	29.5%	(28.6%)															
具体的な取組状況	<b>【探究科学科1年】</b> 4～5月に、「論理の前提・飛躍、因果関係、推論、反論」などの論理的思考方法を学んだ。 6月～7月は、理数科学科・人文社会科学科とも「巡検研修」として、班ごとにフィールドワーク（7月）を含む探究的学習活動に取り組んだ。仮説→検証の科学的手法に則って研究の成果をまとめた。 9月の文化活動発表会において科別の発表を行い、その後は班に分かれミニ課題研究に取り組み、その成果を12月にポスターセッションで発表した。 また3校合同発表会で、3校の上級生のポスターセッションに参加・見学した。 11月に「学問への招待（京都大学からフランス人講師、関西学院大学からスペイン人講師来校）」を実施し、地域の大学や研究機関で活躍している若手外国人研究者から英語で研究の話聞く経験を通して、研究活動に対する関心・意欲を高めた。12月から2年次に取り組む課題研究に向け、テーマ設定等に向けた事前学習に取り組んでいる。 <b>【探究科学科2年生】</b> 4月から各班の計画に従い、探究活動を行った。5月にかけて、富山大学教官による指導助言を受け、課題研究テーマの方向性について調整を図った。 6月に「学問への招待（中部大学からインド人講師、上智大学よりイタリア人講師）」を実施し、地域の大学や研究機関で活躍している若手外国人研究者から英語で研究の話聞く経験を通して、研究活動に対する関心・意欲を高めた。 8月、2泊3日の東京方面研修で、大学見学および最先端の研究機関の施設見学や、班別学習による課題研究に沿った研修・見学を行った。 9月の文化活動発表会、また12月の3校合同発表会で、ポスターセッション形式のプレゼンテーションを行った。 3学期は、これまで行った発表を研究集録にまとめる作業を行い、最終日には発表会を開き、互いに質問や意見交換をする中で内容を深め、探究活動を締めくくった。 <b>【普通科1・2年】</b> 1学期に「論理的思考力」を育成する学習を4時間実施した。その結果、文化活動発表会では、「仮説をたてて、検証を試みる」という手順を含む内容が、定着してきている。																
評 価	C	A															
	「論理的思考力テスト」では、昨年度より5項目中3項目で正答率が下降した。確かな論理的思考力を養うためのより効果的な指導方法を再度検討して行いたい。	80%以上が意欲的に取り組んだ結果が出た。より主体的・意欲的に取り組めるよう、内容や指導方法を工夫していきたい。															
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの生徒が探究的活動に取り組んでいる様子が窺える。評価方法など、改善の余地があると思われる。</li> <li>一つのテーマに対し、深く考え追求する活動は、今後も必要で良い活動である。</li> </ul>																
次年度へ向けての課題	平成28年度入学生から探究基礎Ⅰ・Ⅱの時間配分を変更し（1年次1単位、2年次2単位）、これまでの指導内容の課題を洗い出すとともにその抜本的な見直しを図った。新しい探究基礎Ⅰ・Ⅱを担当する教員は、校内教諭、大学教官、その他外部講師をあわせると50名を超える。その指導体制でより効果を得られるような工夫を継続する必要がある。また、その前提となる全教職員間の共通理解を深める工夫も必要である。																

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった）